

禁断の チーズとワインの マリァージュ

vol.8

池上 沙羅

第八話

続 花贈りの似合う男たち

ドアを開けると、そこは花畑だった。両手に抱えきれないほどのジャスミン、フリージア、スイートピー、チューリップ、ピバーナム、アネモネ、バラの春色のブーケを持った彼がレイバンのサングラスのまま言った。

「このブーケは、花のようにきれいな女性へのプレゼントです」。

「あ、ありがとう…」。

と、心から嬉しいけれど、大きな花瓶も無いし困惑している私に、

「花瓶なら、ほらっ。風邪っぴきのお姫様のためにチキンスープも持ってきたよ。キッチンは、こっちかな?」

と、ドクターマーティンのブーツの踵を響かせて、キッチンへ消えた。金魚鉢のような透明で大きな花瓶が3つ、春の陽差しに輝いている。なんだか幸せな気持ち…。

「何してるんだ? ベッドに戻れよ! っってダティが言ってるだろ」。

と聞き慣れない米語だが温かみのある言葉に温められながら、このブルックリンによくあるプラットホーム※注1タイプの一番奥にあるクイーンサイズのベッドに潜り込んだ。

眠りの底から押し上げられたのは、彼になじんだサンダルウッドの香り

のせいかもしれない。スープの香りと大きな花瓶に美しく活けられた花畑の香りを、暫し目を開けずに愛しむ。

「薬を飲む前にこれを食べて」。

と彼が言いながら、ベッドの縁に腰かけて、大きな手でやさしく支えて起こしてくれた。差し出されたスープは具沢山で、食べるスープだ。

出会ってまだ七週間、そして、後一週間でお別れの儂い恋の一つ一つの出来事を憶えておこうと、心に言い聞かせながら無言で食べた。初めてなのに懐かしい美味しさ。

「早く治って欲しいんだ。ニューヨークの思い出に一緒に行きたい所もあるし。少し荒療治だけど、汗かいて熱を追い出そうか」。

と彼は言いながら、熱のある私のうなじに乱暴に唇を押し付けてくる。私が抵抗するふりをすると、彼は増々燃え上がる。やがて、二人の野性が顔を出し始め、溶けて一つになる。

快樂の甘いゆたいから醒めないように、そっとベッドを抜け出して、お気に入りの泡を開けた。ジャスミンとフリージアの甘い香りが、二人の身体を包み込む。やさしく細やかな泡が、火照り乾いた二人の喉を潤していく。フルートグラスの半分も飲んでいないのに、彼がせかすので、急いでシャワーを浴びて、萌黄色の

ミニドレスを纏った。共布のリボンの付いた帽子を被ると、彼が手招きした。花瓶に活けられた花畑の向こうから動画を撮りながら彼が言う。

「Say! You'll come to see me in LA in shortly.」

「I'll come to see you in LA in shortly.」

※注1. プラットホームのように細長い2LDKのアパート



〈ワイン〉 マスカットオウヴァアレキサンドリア
「ボタニ」
〈チーズ〉 デリスババイヤ

SOMMELIERE

SARA
IKEGAMI



八戸生まれ。イタリア、フィレンツェでワインを学ぶ。2001年ニューヨークでWSET国際ワイン資格取得。ワイン輸入会社勤務の傍らニューヨークの人気レストランにてソムリエールとしても活躍。2013年より金剛ビル2F「幸福ワイン食堂バルバレスコ」のソムリエールとして活躍中。常時15種類のグラスワインと90種類のボトルワインを提供し、世界のチーズと世界のワインとのマリァージュを皆様にお伝えすることを使命としている。